

状態自尊感情尺度の作成の試み

Development of a State Self-Esteem Scale

阿部 美帆

Miho ABE

目白大学大学院心理学研究科
Graduate School of Psychology,
Mejiro University

今野 裕之

Hiroyuki KONNO

目白大学人間社会学部
Mejiro University

問 題

本研究の目的は状態自尊感情尺度の開発である。自尊感情については、多方面から研究が行われているが、近年では自尊感情を、日常生活の様々な出来事に対応して変動する自尊感情である“状態自尊感情 (state self-esteem)”と状況および時間を通じた平均レベルの自尊感情である“特性自尊感情 (trait self-esteem)”に分けて捉える研究者も増加している。たとえば Leary, Tambor, Terdal & Downs (1995) は、自尊感情は他者から受容されている程度および拒否されている程度を監視するシステムであるという sociometer theory を検証するための実験を行い、状態自尊感情が受容経験によって上昇し、拒否経験によって下降することを明らかにしている。また、小塩 (2002) は自尊感情の変動性と自己愛傾向の関連に注目し、自己愛傾向の下位側面に自尊感情レベルを高める要因と抑制する要因があることを指摘している。

このように状態自尊感情に関する研究が増加しているにも関わらず、状態自尊感情を測定する共通のツールは今のところ存在しない。

状態自尊感情の測定を目的として開発された尺度としては、Heatherton & Polivy (1991) の state self-esteem scale があげられる。この尺度は信頼性・妥当性とも確認されているものの、広く使用されている Rosenberg (1965) の自尊感情尺度と異なって、多次元的な尺度であることもあり、現在のところ広く使用されてはいない。また、専用の尺度を用いない場合もある。Leary et al. (1995) は不安や抑うつを測定することで状態自尊感情の指標としており、小塩 (2002) は Rosenberg (1965) の尺度をそのまま用いている。

以上のように、状態自尊感情研究に対する関心は高まっているものの、その測定方法は研究者ごとに異なっているというのが現状である。しかしながら、このままでは今後状態自尊感情の研究が蓄積され、研究知見を比較・統合するという段階に至って、研究間の比較が困難になる可能性がある。

そこで本研究では、日本語版の状態自尊感情尺度の開発を試みる。具体的には、Rosenberg (1965) の self-esteem scale および山本・松井・山成 (1982) の日本語版をもとに、教示文と項目を改変して状態自尊感情尺度を作成し、信頼性と妥当性の検討を行う。なお、被調査者としては広範囲な対象が考えられるが、本研究は尺度開発の初期段階であるため、大学生に限定して調査を行う。

研究 1

Leary et al. (1995) の sociometer theory によれば、自尊感情は対人関係における受容感と密接な関係があると予測されている。この理論に基づいて、彼らは他者からの受容と感情状態との関連を検討し、受容感が高いほど状態自尊感情が高いことを実証している。この知見に基づくならば、妥当な状態自尊感情尺度は他者からの受容経験と正の関連を持つと考えられる。ただし、他者からの受容経験は特性自尊感情とも正の関連が予測できる。すなわち長期的な受容感ならば特性自尊感情と関連があり、現在もしくは現在を含む短期的な受容感ならば状態自尊感情と関連があると考えられる。そこで研究 1 では、現在の状況で他者から受容されているという感覚を測定するため、短期間 (“この1週間”) に限定した他者からの受容経験を尋ね、これが特性自尊感情よりも状態自尊感情とより強く関連があるかどうか確認し、構成概念妥当性の検討を行う。

方 法

2004年7月に、都内私立大学生120名(男子24名、女子92名、不明4名)に対して、心理学の講義の時間に質問紙調査を実施した。質問紙は以下のとおりである。

①状態自尊感情尺度：山本ら(1982)の自尊感情尺度をもとに作成した。教示文については、現在の感情状態についての回答を引き出しやすいよう“これは、あなたが「いま」この瞬間に考えていることを測るためのものです。普段ではなく「いま」の自分が考えていることです。”という文章を付け加えた。また、すべての項目文の先頭に“いま”という文を付加し、文末は“感じる”とした。「あてはまる」から「あてはまらない」までの5件法で回答を求めた。②特性自尊感情尺度：状態自尊感情尺度との相違を明確化するため、山本ら(1982)の自尊感情尺度を改変して作成した。教示文に“これは、あなたが「ふだん」考えていることを測るためのものです。今ではなく「ふだん」あなたが考えていることです。”という文章を付加し、各項目の先頭に“ふだん”という文を付加し、文末は“感じる”とした。回答形式は状態自尊感情尺度と同じであった。③受容経験：“この一週間であなたは周囲の人からどのような扱いを受けたと感じますか。個々の関係を細かく考えるのではなく、全体的な感じでお答えください”と教示し、その際に他者から“ほめられた”など受容された感覚について4項目、“けなされた”など拒否された感覚について4項目(逆転項目)尋ねた。回答形式は5件法であった。

結 果

はじめに、状態自尊感情尺度10項目の平均および標準偏

Table 1 状態自尊感情尺度の平均値と標準偏差および主成分分析結果

項目	平均値	SD	主成分
1 いま、自分には人並みに価値のある人間であると感じる。	3.59	1.08	.74
2 いま、自分には色々な良い素質があると感じる。	3.26	1.06	.78
3 いま、自分は敗北者だと感じる。	2.43	1.19	.65
4 いま、自分は物事を人並みにうまくやれていると感じる。	3.28	0.99	.60
5 いま、自分には自慢できるところがないと感じる。	2.82	1.22	.60
6 いま、自分に対して肯定的であると感じる。	3.25	1.10	.74
7 いま、自分にほぼ満足を感じる。	2.68	1.12	.55
8 いま、自分はだめな人間であると感じる。	2.79	1.19	.80
9 いま、自分は役に立たない人間であると感じる。	2.56	1.17	.82

差を算出した (Table 1)。その結果、平均 +1SD が理論上限を超えた 1 項目 (“いま、自分をもっと尊敬できるようになりたいと感じる”) を除外し、残る 9 項目を分析に用いた。尺度の信頼性は内的整合性について検討を行った。9 項目に対して主成分分析を行ったところ、第 1 主成分に 9 項目すべてが .50 以上の負荷を示しており、 α 係数は .87 で十分満足できる値であった。また、特性自尊感情尺度および受容経験に対しても、同様の分析を行った。その結果、特性自尊感情尺度は平均 +1SD が理論上限を超えた 1 項目 (“ふだん、自分をもっと尊敬できるようになりたいと感じる”) が除外され 9 項目となり、 α 係数は .87 であった。また受容経験は 3 項目が除外され 5 項目となり、 α 係数は .69 であった。以上から尺度は十分な信頼性を保有することが確認された。

次に妥当性を検討するため、状態自尊感情と受容経験との相関係数を算出したところ $r = .54$ ($p < .01$) という値を示した。特性自尊感情と受容経験との相関は $r = .45$ ($p < .01$) であった。また、状態自尊感情と特性自尊感情の相関を求めたところ、 $r = .73$ ($p < .01$) であった。

研究 2

一般に自尊感情と不安は負の関連が認められる。研究 2 では構成概念妥当性の検討のため、特性および状態自尊感情尺度と同様に特性・状態から構成されている STAI との関連を検討した。

方法

2004 年 7 月、都内私立大学生 45 名 (男子 9 名、女子 36 名) に対し、学期末テストの直前に質問紙調査を実施した。質問紙は以下のとおりである。①状態自尊感情尺度および②特性自尊感情尺度：研究 1 で作成された 9 項目。③特性・状態不安尺度：日本語版 STAI (清水・今栄, 1981)、それぞれ 20 項目について教示文および選択肢を一部改変し、「あてはまる」から「あてはまらない」までの 5 件法で回答を求めた。

結果

妥当性の検討のために、状態自尊感情と特性・状態不安との相関係数を算出したところ、特性不安との間に $r = -.57$ ($p < .01$)、状態不安との間に $r = -.53$ ($p < .01$) という値を示した。また、特性自尊感情と特性・状態不安との相関係数を算出したところ、特性不安との間に $r = -.65$ ($p < .01$)、状態不安との間に $r = -.24$ (n.s.) という値を示した。

総合的考察

研究 1 において、状態自尊感情尺度の信頼性が確認された。次いで、妥当性の検討のために、状態自尊感情と最近

一週間の受容経験との関連を検討したところ正の相関を示した。しかし、特性自尊感情と受容経験の間にも、値はやや小さいながらも、同様の関連がみられた。これは、特性自尊感情が出来事や経験から影響を受け変動しうするために (小塩, 2001)、“一週間”という期間の受容感が、特性自尊感情に影響を与えていたと考えられる。研究 2 においては、予想通り状態自尊感情は状態不安と、特性自尊感情は特性不安と明確な負の相関を示した。しかし、特性自尊感情が状態不安と関連が無かった一方で、状態自尊感情と特性不安の間には関連がみられた。これは、測定を行った期末テスト直前という状態が、高特性不安者の評価懸念状態を喚起し、拒絶されるのではないかという感情を強く引き起こし、状態自尊感情が低下した可能性がある。

以上から、状態自尊感情尺度の信頼性は確認されといえるが、妥当性については部分的に確認されたのみにとどまり、課題が残されたといえる。したがって、今後はさらに継続的に妥当性を検討する必要がある。特に、尺度得点が真に被調査者の状態を反映しているかどうか確認する必要があるだろう。たとえば、小塩 (2001) の日記形式による測定のように同一個人内で複数回測定した値の変動の検討や、受容や拒絶を実験的に操作し、実験操作に伴って尺度得点が変動するかどうか検討することが考えられる。さらに、尺度を最終的に広範囲な対象に利用可能なものにするため、被調査者の検討も必要と考えられる。今後は以上のような検討を重ね、尺度の洗練を図る必要があるだろう。

引用文献

- Heatherton, T. F. & Polivy, J. 1991 Development and Validation of a Scale for Measuring State Self-Esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 895-910.
- Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. T., & Downs, D. L. 1995 Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 518-530.
- 小塩真司 2001 自己愛傾向が自己像の不安定性、自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究, **10**, 35-44.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- 清水秀美・今栄国晴 1981 STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版 (大学生用) の作成 教育心理学研究, **29**, 62-67.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.
- 2004. 10. 25 受稿, 2005. 2. 10 受理—